

一朝の礼拝から 1—

クリスチャンが家族を亡くすということ

コヘレトの言葉 3 章 1~2 節

今年も残り少なくなってきました。皆様にとって、2023 年はどんな年であったでしょうか。私には大きな出来事が 2 つありました。1 つ目は膝の手術を受けて、40 日間入院したことです。退院後も杖での生活を余儀なくされ、ようやく最近、杖なしでも歩けるようになりました。2 つ目は、私の入院中に父親が亡くなったことです。実家では私一人がクリスチャンでした。「私はキリスト教信者としての道を歩んでゆく。」今まではそれでうまくいっていました。しかし、ノンクリスチャンの親を亡くした時、その死をどのように受け止めて良いのかよいのか葛藤してしまいました。

例えばヨハネによる福音書 3 章 18 節には「御子を信じるものは裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである」と書かれています。このような御言葉はノンクリスチャンの家族を失った者の心に鋭く突き刺さります。一方で、救済が普遍的であると説く牧師や神学者もいます。すべての人がイエス・キリストの贖罪によって、救われているという教えです。例えば、第一テモテの手紙 4 章 10 節には以下のような聖句があります。「わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いているからです。」これを読む限りでは、信じていない人が救いの対象から外されているわけではないというふう解釈できます。全ての人々が救いの対象になるという考え方を、普遍主義と呼んでいるそうです。ノンクリスチャンの親を失った子どもにとって普遍主義の思想は心を揺さぶられるものがあります。但し、普遍主義はキリスト教の通説として広く受け入れられているわけではないので、注意が必要です。

普遍主義が神学的に正しいのか間違っているのかの問題はさておき、これだけは言えるのではないのでしょうか。最後の審判を下すのは我々ではなく、神であるということです。そして神様の考えは我々の理解を遥かに超えています。同時に神は慈悲深く、正しいお方です。神を信頼し、全てをお委ねしたいと思います。

狩野 暁洋 (英語学科)

一朝の礼拝から 2—

経験はお導き

エレミヤ書 6 章 16 節

今日はエレミヤ書から御言葉を選択させて頂きました。まずこの言葉の意味としては「新しい場所に立っても、昔からの経験を活かして幸せに至る道を進むことで、魂に安らぎを得られる結果となる。」ということだと思いました。まず、ここを選択した理由をお話いたします。先日チャペルアワーの学生スピーチの際に、我が家に産まれた 4 匹の子犬の話をしていただきました。4 匹中 3 匹は知り合いのご家庭に譲渡したのですが、それぞれの行き先を決める際に私は神様の御力を感じる場面がありました。それは、それぞれの行先です。長男と次男は割とすぐに納得のいく行先を得られましたが、三男と四男に関しては本当に神様のお力が働いたと感じる結果でした。

まず三男についてです。子犬が生まれた当初、心から信用出来絶対に幸せになれる家庭に譲渡すると家族で決めていたので、なかなか行先を決まらずに悩んでいました。そんな時、母犬がたまたま診察に行った動物病院にて、獣医師がよければ 1 匹引き取りたいと話をしてくださったのです。獣医師の愛犬となれば健康は約束されまじ、まさかそんな事があるのかと本当に驚きました。

次に四男についてです。四男は生まれた当初心臓が動いておらず、ギリギリに命を吹き返しました。ある意味ふたつの命を授かった子でありましたが、そんな彼は牧師一家に引き取られることになりました。決定した時なんだか深い意味を感じて感動しましたし、なにより今いちばん元気に動き回っているのはこの子で、神様に守られているな、と常に感謝しております。

これらの経験を積んで、神様はそれぞれが幸せになれる適した場所へ導いてくださることを学びました。人生の一つ一つが神様のご計画であり、経験であるそれらを信じること、つまり神様の御力を信じることで魂に安らぎを得られる結果となるのだと思います。これから先、何か新しいことを始める時、新しい場所にたった時、今までの神様の導きの元での経験を信じて進み続けようと思います。

今田 涼加 (音楽学科 3 年)